
異世界と超能力者

光闇

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

異世界と超能力者

【Nコード】

N4982Z

【作者名】

光闇

【あらすじ】

時は平成三十×年。科学が進み世界が統一され連合国が生まれてから十数年。人類に超能力者が現れて数年。

軍事利用などから解放と自治を求む超能力者とその超能力者を利用し制圧を試みる連合国との戦いが泥沼と化していた。

そんなある時、連合軍所属“連合軍第七遊撃部隊”を率いている有馬 有紀の下に秘匿作戦を行うようにと命令された。

彼は命令に従いある農村に向かった。

彼と“連合軍第七遊撃部隊”の運命を変えると知らずに

プロローグ

平成三十×年。科学が進み世界が統一され連合国が生まれてから十数年。人類に超能力者^{サイキッカー}が現れて数年。

軍事利用などからの独立を求む超能力者とその超能力者を利用し制圧を試みる連合国との戦いが泥沼と化していた。

欧州などを中心とした独立戦争は独立軍の劣勢のまま時間が過ぎていった。

しかし、劣勢とはいえ超能力者は依然として強力な力を持っているため、一般兵などから見れば生身で戦車や軍用ヘリを次々と撃墜する独立軍の超能力者は畏怖の対象であり士気に大きく関わっていた。むろん連合国側の超能力者が出てくれば戦車などの兵器よりそちらを優先してくるのは連合国も分かっていたが、

『超能力者に対してまともに戦えるのは超能力者のみ』

と言う定説の為に攻撃させるほか無かった。

劣勢とはいえ欧州に展開している独立軍は負け戦ばかりではなかった。たびたび連合軍を圧倒していることもあった。

一番大きかったのが第三次欧州奪還作戦（連合軍が付けた作戦名）の時に、独立軍はゲリラ戦法を採用し連合軍は大きな被害を出し後退した。

そして、後退を開始したときに殿を^{しんがり}担当したのが“連合軍第七遊

撃部隊”だった。

“連合軍第七遊撃部隊”とは日本の所謂いわゆる学生兵であったが遊撃部隊に所属する全員が超能力者であり、武器は通常の銃器では無く遊撃部隊専用に配備された異形の武器だった。

隊長は有馬 有紀。若干二十歳ながら天才と言われその指揮は的確だった。そして、武器は大太刀と太刀の二刀流であり、敵味方から二刀の剣聖 と言われ恐れられていた。

そして、“連合軍第七遊撃部隊”は第四次欧州奪還作戦へ参加した。

これはそんな彼とそれを取り巻く者達の物語である。

プロローグ（後書き）

この前予告した通りに消しました。

この小説は修正をしながら書くつもりなので行進は遅くなります。

始まりの死闘（前書き）

もちろんフィクションです

始まりの死闘

とある農村の屋敷で人知れず超能力者同士の死闘は続いていた。

「はあああ！」

何度も死線をとみにくぐり抜けてき二本の刀うち片方を抜かずに青年は必死に振っていた。

『力』を乗せた刀は蒼く輝き、空中に浮かぶ拳ひとつ分くらいの黒い球体を難なく斬り青年は距離をとった。

「はあ……はあ……」

「クスクス……あの二刀の剣聖でもそろそろ辛くなってきたでしょう？」

先ほど斬った黒い球体を無数に体の周囲に展開させている女性は彼を嘲笑っていた。

剣聖と呼ばれた青年は荒れている息を整え何事もなさそうに応えた。

「……お前に心配される筋合いは無い。

それより自分の命の心配でもしとけ」

そう言いつつも彼は内心焦っていた。

(あの黒い球体が厄介だな)

彼は球体が重力で出来ていることは何度か引き込まれそんな感覚で理解していた、が

(何も手を加えていない物質が近寄れば吸い込み、圧縮し潰す……か)

あの球体に触れられるのは彼が持っている刀も『力』を乗せていない刀身以外が触れれば彼ごと吸い込まれ圧縮されるだろう。すでに部屋は砲弾が通った跡に近いものが無数に走っていた。

(やっかいな能力だが……霊力を乗せれば消失するのはありがたい)

超能力と似て非なる力である霊力とは命ある物の全ての中に存在し、寿命はその残量とも言え空になれば死。

さらに寿命死以外の死を迎えたとき体内の霊力は外部へと拡散し別の生命体へと吸収され、同じ様に寿命死以外で死ねばやはり拡散し、また同じように別の生命体へと吸収を繰り返す。だが、古来の日本には自分の霊力を知覚し超能力とは非なる力として使えた血筋が今でも生き残っており、彼はその血筋である。

ここで勘違いしてはいけないのが創作物語やもしかしたら在るかも知れない パラレルワールド 異次元世界 に出てくる『魔力』とは違い、人間や一部の生命体、さらに一部の無機物と言った不特定多数に存在するものではなくこの 世界 の地球上に存在する生命体の中に宿っている力が霊力。

そして、最近になって現れ出した超能力とは運の良い人(または運の悪い人)の脳の未解明部分の一部から発生している力で個人にか

なりの差が出て来ている。

その霊力を帯びた刀をスツと構え、女の動きを注視し拳動を確認する。

「どつしたの？　もしかしてビビッてる？」

「……………」

彼女の問いを黙殺して女の動作を注意して確認していった。

「そつちが来ないなら攻めちゃうよー！」

パチンツ！と指を鳴らしさらに球体を増やし、現在進行形で彼が消している球体の数を上回った。

「クソがッ！」

そして黒い球体は弾丸となって彼を襲う。一本の刀で打ち消そうとするが何しろ数が多すぎた。

最初こそ防いでいた彼だが、防ぎきれなかった球体の一つが左腕を僅かに掠った所で彼は横に飛び

「チツ……………」

「アハハハハッ！」

「仕方ない、『交換』スタート『速さ』に『交換』」

彼の能力は『交換』^{トレード}は一度受けたことのある能力をまたは触れた事のある能力を制限された状態一日一回を使用できる上に、さらに別の能力もあるが今は語らないで良いだろう。

「それがあなたの能力？ 面白そうじゃない！」

「……言ってる」

高速で消しては光速で増えて行く。それを繰り返したんだん追い詰められていく彼だが彼の瞳は劣勢になりながらも爛々と輝いていた。

「だが、まだ行けるか……」

しかし、劣勢とはいえ彼が受けた大きい傷は先ほどの左腕を掠めそこから血を滴らせているところ位だ。

「そうなの？ もっと数を増やそうか？」

「遠慮は……しておこう」

彼は獰猛な笑みを浮かべながら血で濡れている左手で未だに使われていなかった刀の柄に触れ

「天城二刀流奥義」

構え足腰に力を込め、

「瞬連月」

人の動体視力を超えた動きを視覚化させたのは紅の軌跡。
先ほど彼女が傷を負わせた左腕からの出血だった。

「……えッ？」

チンと静かに両方の刀を鞘に戻した。数十はあつた黒い球体は全て消し去った様子を後ろを向いて驚いている彼女は隙がありすぎた。

「そこだッ！」

彼はがら空きになった女の頭に向かって斬りかかった。当たれば死、掠れば致命傷となる一撃を。

「わッ！」

だが、突如横からきた黒い球体が突撃し刃を覆っていた霊力と対消滅した衝撃により必殺の一撃は逸らされた。

「だが……！」

しかし体重の乗った一撃は右肩を切り落とした。

「……痛っいな〜」

何も事もなかった様に呟き球体が近くにより止血を施し、そして左手で顔を隠しながら満面の喜色を浮かべ嗤い出した。

「ハハ………ハハハハ……アハハハッハハハハハハハッ！
ハハハハハハハハハハハハハハハハハハハハハハハッ！」

始まりの死闘（後書き）

遅れてすみません。

誤字脱字等がありましたら連絡お願いします

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4982z/>

異世界と超能力者

2012年1月6日20時45分発行